

企画展「美術・解体新書 奈良県立美術館名品展《夏》」の見どころ（展示構成）

はじめにー「美術」ってナニ？

美術館には様々なものが展示されていますが、中には、何を表しているのかわからないものや、美術品だと思えないものも含まれています。「美術」の捉え方は人それぞれです。「美術・解体新書」と題したこの展覧会は、「美術ってナニ？」をキーワードに、美術の魅力や特徴をわかりやすく紹介しようというものです。

歌川芳藤《唐の子がよりにかたまって人になる》

江戸時代・弘化4～嘉永元年（1847～1848）頃 竪大判錦絵
本展の一つ目の目的が、美術の特徴を捉えていただくことです。
キーワードは、基本編1～7で紹介する「浮世絵」です。



普門暁《化粧》

大正7年(1918) 鉄、彩色
本展の2つ目の目的が、この作品の魅力を発見していただくことです。
「化粧」と題した抽象的な立体物ですが、何を表現しているのでしょうか？

今週のお宝

本展の3つ目の目的が、週替わりで展示する当館の名品を通じて美術の魅力を感じていただくことです。

1週 伝 雪舟《秋冬山水図屏風》室町時代
（15～16世紀） 紙本墨画淡彩 6
曲屏風



2週 菱川師房《見返り美人図》
江戸時代（17～18世紀） 絹本着色 軸装



3週 曾我蕭白《美人図》
江戸時代（18世紀） 紙本着色 軸装



4週 《伝淀殿画像》
桃山～江戸時代初期（17世紀） 絹本着色 軸装



5週 葛飾北斎《瑞亀図》
江戸時代（18世紀） 紙本着色 軸装



6週 《白綸子地梅樹光琳文様 小袖》
江戸時代（18世紀） 綸子地 染、繡 小袖



I 基本編－「美術」以前

展覧会は、主に江戸時代以前の作品を展示する「基本編」と明治時代以降の作品を展示する「応用編」の2部構成になっています。基本編では、日本美術を「世界」「宗教」「文学」「芸能」「歴史」「生活」「社会」の7つのテーマに解体し、特徴を浮き彫りにします。海外の文化に刺激を受けながら、天皇や宮廷から、武家、大衆へと、担い手の趣向を反映させ、展開してきた日本美術の歩みをゆるやかにたどります。

1 日本美術と世界

基本編の1では、「日本美術と世界」と題して、中国・朝鮮半島との交流を示す焼きものなどを展示し、海外の文化に影響を受けながら育まれてきた日本美術の特徴をご覧ください。

《加彩婦女俑》中国・唐（618～907） 陶製 彩色

高く髻を結び上げ、ゆったりとした衣を身に付けたふくよかな顔立ちの美人像です。奈良・天平時代の文化に影響を与えた中国・唐のおおらかな感性が伝わってきます。



2 日本美術と宗教

基本編の2では、「日本美術と宗教」と題して、仏教をはじめとする宗教美術を展示します。本来、儀式や礼拝の対象として儀軌にもとづき制作されますが、時代の趣向を反映させながら造形的にも変化を遂げ、美術品として鑑賞されるようになりました。

菊池容斎《五百羅漢図》文政10年（1827） 絹本着色 軸装

仏教の開祖、釈迦の弟子である「羅漢」も、信仰とともに盛んに制作された尊像です。16羅漢や500羅漢など群れをなし、剃髪に袈裟をまとった僧侶の姿で表されます。



3 日本美術と文学

基本編の3では、「日本美術と文学」と題して、日本文化の国風化が進んだ平安時代、かな文字の発明によって発展した日本文学をテーマとした作品を展示します。物語の一場面や歌人たちの肖像を、書画一体の形や意匠化するなど、様々な形で表現しています。

大坪正義《国見図》昭和15年（1940） 絹本着色 軸装

舒明天皇が豊かな国土を見下ろして詠んだ「国見歌」（万葉集）をもとに描かれた作品です。日本の自然風景や風俗を、繊細な筆致で色彩豊かに描き上げたやまと絵の特徴がよく見て取れる作品です。

4 日本美術と芸能

基本編の4では、「日本美術と芸能」と題して、室町幕府によって重用された禅宗とともに、中国より伝来した水墨画や、幕府の庇護のもとで確立した能や茶などの芸能を展示し、禅の精神を取り入れた簡素で静寂な日本美術の一面を紹介します。

《達磨図》室町時代（15～16世紀）頃 紙本墨画 軸装

禅宗の開祖・達磨の半身像です。ぎょろりと目を向きへの字型に口を結んだ顔貌の繊細な描写に対して、衣の線は減筆体で表すなど、水墨画による達磨像の典型的な作品です。

5 日本美術と歴史

基本編5では、「日本美術と歴史」と題して、武家が政治の実権を握った鎌倉時代以降、各地で制作される

ようになった武具や、戦国の世を臨場感豊かに描いた合戦絵巻、近世都市へと発展する京の景観を収めた洛中洛外図など、絢爛豪華な武家文化を紹介します。

《洛中洛外図屏風》江戸時代（17世紀） 紙本金地著色 6曲屏風

京都の市内と郊外の景観を収めた金碧の屏風です。左隻に描かれている二条城の位置などから寛永年間（1624-44）前期頃の風景であることがわかります。祇園祭などの風俗も細やかに描写されています。



(左隻)

6 日本美術と生活

基本編6では、「日本美術と生活」と題して、江戸時代、産業や交通網の発達により富を蓄えた町人たちの生活文化を紹介します。技巧を極めた染織品や浮世絵風俗画を通して、歌舞伎や俳諧などの文芸や遊興娯楽が栄えた、この時代の活気に満ちた美術を概観します。

《萌葱縮緬地柳桜筏文様 小袖》江戸時代（18世紀）縮緬地 染、繡（5-6週展示）

萌葱色の縮緬地に、花筏と柳を染め表し、摺匹田と刺繍を加えた小袖です。流水に乗って花筏が流れ行く図ですが、その水の流れが柳の枝にも見えるという、春の趣ゆたかな意匠です。



7 日本美術と社会

基本編7では、「日本美術と社会」と題して、大衆の目で捉えた社会の様相＝世界・宗教・文学・芸能・歴史・生活＝を浮世絵版画を通じてご覧いただきます。時代や地域によって、評価も解釈も異なる「美術」の特質を確認し、基本編のまとめとします。

東洲斎写楽《市川男女蔵の奴一平》

江戸時代・寛政6年（1794）5月～7年（1795）1月 雲母摺錦絵（後期展示）

現代のプロマイド的存在の役者絵。役者の個性や役柄をデフォルメして表現することで、対象の真に迫っています。



歌川広重《名所江戸百景 大はしあたけの夕立》

江戸時代・安政4年（1857） 豎大判錦絵（後期展示）

オランダの画家・ゴッホが模写したことでも知られる作品です。制作された当時は、土産物とされるような廉価なものでしたが、今日、世界的に評価されています。



II 応用編－「美術」以後

「応用編」では、明治時代以降の作品を、「日本美術の誕生（絵画・彫刻）」「日本美術の展開（平面・立体）」「日本美術の軌跡（工芸）」の3つのテーマに解体し、西洋から伝わった「美術」というものの見方とともに「日本画」「洋画」「彫刻」といったジャンルが確立する日本美術の形成過程から、様々な芸術活動が展開された第二次世界大戦後の動向まで紹介します。美術家たちの多彩な感性や価値観に触れていただくと同時に、「美術」の新たな魅力を発見していただければ幸いです。

8 日本美術の誕生（絵画・彫刻）

応用編の8では、「日本美術の誕生（絵画・彫刻）」と題して、西欧伝来の画材や技法を用いた「洋画」と日本古来の「日本画」、そして「彫刻」と名付けられた立体造形が、日本美術のジャンルとして確立し、その表

現を深化させていく過程をご覧ください。

上村松園《春宵》 昭和 11 年 (1936) 絹本着色

春の宵、料亭の縁側で何やら内緒話をする女性たちの姿を、しっとりと描き上げた、美人画の巨匠・松園円熟期の作品です。



久米桂一郎《清水秋景図（山径晚暉）》

明治 26 年 (1893) カンヴァス 油彩 第 4 回内国勸業博覧会妙技 2 等賞

京都・清水寺周辺の風景です。黒田清輝とともに、明るい色彩と繊細なタッチによる外光表現を日本に伝え、洋画の普及に尽力した久米の代表作。



柳原義達《犬の唄》 昭和 36 年 (1961) ブロンズ 第 6 回日本国際美術展他

普仏戦争に敗れたフランス人の反省と抵抗の精神を表現したシャンソン「犬の唄」を歌う女性のポーズに着想を得た、戦争に対する皮肉や反抗心が込められた作品。

9 日本美術の展開（平面・立体）

応用編の 9 では、「日本美術の展開（平面・立体）」と題して、第二次世界大戦後の「美術」を紹介します。社会的変動や国際化によって、日本画や洋画、彫刻といった既存のジャンルを打ち破るような多様な表現活動も展開された日本美術の動向をご覧ください。

田中敦子《作品》 昭和 32 年 (1957) ボード ビニール塗料

電球で作られたドレスをまとして踊る自身のパフォーマンスを絵画化した作品。点滅するライトと絡みつくコードがリズムカルな動きを表現しています。

井上武吉《my sky hole 95-1》 平成 7 年 (1995) 設置 アルミスチール

美術館 2F のホールに設置されたステンレスの格子状の作品です。井上は、環境彫刻や発注彫刻など、立体造形の可能性を探究した奈良県出身の彫刻家です。

10 日本美術の軌跡（工芸）

応用編の 10 では、「日本美術の軌跡（工芸）」と題して、赤膚焼や奈良人形一刀彫などの奈良ゆかりの工芸品を展示します。日本古来の技術や美意識を伝えると同時に、私たちの生活や社会と密接に関わりながら展開されてきた、日本美術の軌跡をご覧ください、本展覧会のまとめとします。

富本憲吉《磁器 色絵四弁花更紗模様 六角飾篭》 昭和 20 年 (1945) 磁製 色絵

人間国宝に認定された奈良県出身の陶芸家・富本憲吉の作品。テイカカズラという植物をデザインした、富本独自の四弁花文様が器体の全面にあしらわれています。



田中一光《写楽 200 年ポスター》 平成 7 年 (1995) 紙 オフセット印刷

奈良市出身のグラフィック・デザイナー・田中一光の作品。東洲斎写楽の役者絵にアイデアを得ながらも、現代的なイメージへと見事に昇華しています。